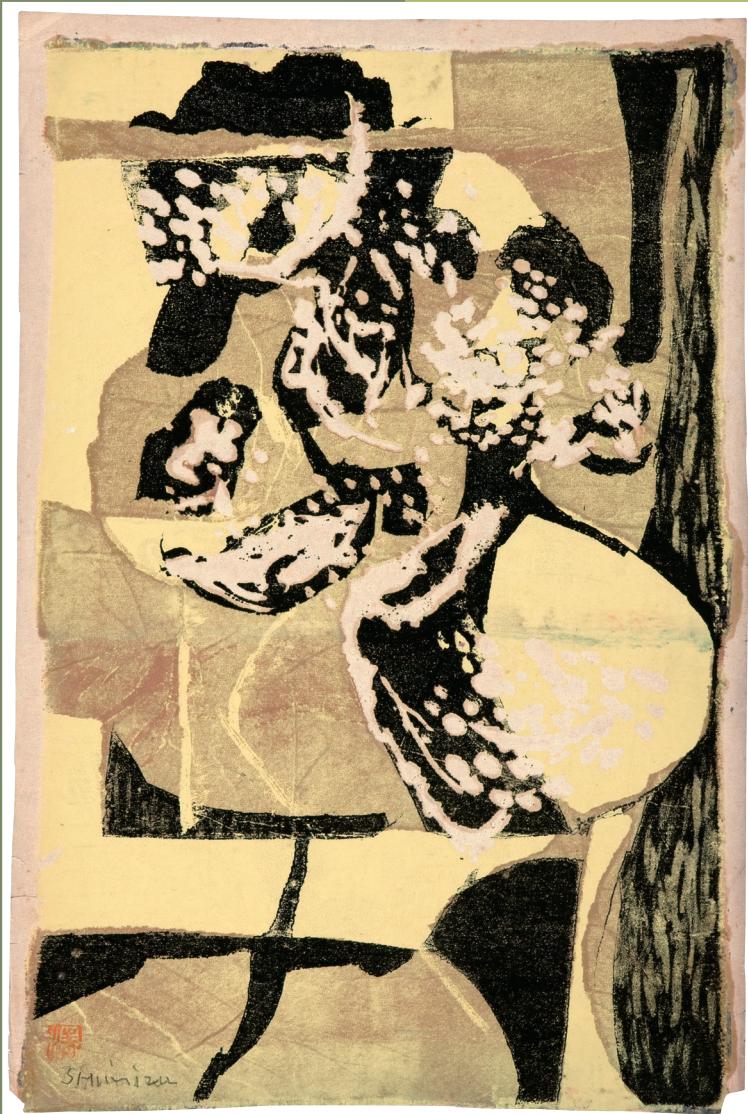


news

THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA



清水武次郎《白い花》1960年 当館蔵
「版画の「アナ」—ガリ版がつなぐ孔版画の歴史」展より

版画の「アナ」

—ガリ版がつなぐ孔版画の歴史展

2011年3月19日(土) — 4月17日(日)

版画の「アナ」—ガリ版がつなぐ孔版画の歴史展では、
和歌山県に生まれた清水武次郎(1915-1993)の
独創的な謄写版による作品を中心に、
現代版画の主要な技法のひとつとなった
シルクスクリーンにいたる多彩な孔版画の歴史をたどります。
ここではまず、清水武次郎の仕事についてご紹介します。



清水武次郎《海のうた》1965年当館蔵

清水武次郎の仕事—謄写版からはじまる孔版画の創造

シルクスクリーンも謄写版も、近代に発明された技術です。それが独自性を主張して、歴史も別々に語られてきました。しかし、染色に使う型染め(ステンシル)に始まる孔版の歴史全体を振り返ると、シルクスクリーンが現代版画の主要な技法となるまでの間に、事務用の簡易印刷法から成長していった謄写版が、版画の分野で果たした役割は小さくありません。

今回の展覧会では、主にコレクションから孔版による作品選び、その世界の広がりと歴史をご覧いただこうとしていますが、そのなかで特にご紹介したいのが、清水武次郎(1915-1993)という孔版画家の仕事です。清水は和歌山市で長く謄写印刷業を営み、そのかたわら孔版画を制作していた人でした。

はじめて当館のコレクションに加わった



清水武次郎《[少女]》1948年当館蔵

た清水武次郎の作品は、1985(昭和60)年に収蔵された、版画家・恩地孝四郎の旧蔵作品《[少女]》です。《[少女]》は謄写版で作られています。

謄写版は、薄い和紙にパラフィンロウをひいた原紙をヤスリの上にのせ、鉄筆で文字や絵を書いて、ロウを除いてできた細かな孔からインクを通して印刷される、シンプルな印刷術です。エジソンの発明した「ミメオグラフ」をもとに改良されたものですが、明治から昭和にかけて、手軽に印刷物を作れる事務用品として、現在のコピー機のように、官庁や会社、学校に普及し「ガリ版」と呼ばれて親しまれています。

清水が謄写版に出会ったのも学校でした。1935(昭和10)年、和歌山師範学校を卒業した清水が赴任した木本小学校では、綴り方(作文)の指導が熱心におこなわれており、先生たちが謄写版で文集

を作っていました。学生の頃から絵を描いていた清水は、絵画の製版が巧みだった先輩の教員、奥山勇の影響を受け、単純なだけに、作り手の技量次第で上質な印刷物ができる謄写版の面白さに魅了されました。

誰もがおりふれた事務用品と思っていた謄写版でしたが、大正末頃には、同人誌などの制作を通して謄写版に出会った、草間京平らを



清水武次郎「昭和13年年賀状」1938年
謄写版、紙 奥山勇旧蔵

はじめとする青年たちがさまざまな技法をあみだし、その表現力を高めていたのです。清水は、自分の手で美しい多色印刷まで実現できる謄写版の楽しさにひかれて印刷物を作るうちに、より創造的な仕事をしたいと考えるようになり、大阪の小泉與吉が発行する『謄写版』や、東京の宮川良が主宰する日本謄写芸術院の指導書で学びながら、自作のカット集の製版を始めています。そして、戦争が終わ



草間京平「謄写芸術」付録「光と静寂とに恵まれた美術謄写印刷研究家の工房」日本謄写芸術院 1933年1月 謄写版、紙 個人蔵

ると、奥山と謄写印刷所「蝸牛工房」を開き、1946(昭和21)年5月に『創作かつと図案集 第1輯』を刊行しました。古書店を兼ね、資材の不自由に悩まされながらの開業でしたが、清水のカット集は好評

で、翌年には江藤正夫の孔版社（東京）からも『孔版カット新集』が出版されています。

この頃、清水は河内長野の横山哲哉が発行する『とうしゃばん』に作品を寄稿し、「関西賛写技術家クラブ」例会にも参加して、優れた賛写版技術者たちと知り合っています。電力も、大がかりな設備も必要としない賛写版は、かつて関東大震災後、失われた印刷工場にかわって活用されましたが、戦後、空襲に遭った印刷工場が再建するまで、その替わりを果たしてふたたび脚光を浴びていました。賛写版技術者たちは、自分たちの役割に誇りを持ち、戦争で荒廃した文化の再生を、自分の手で作りだす美しい印刷物で支えようと全国の仲間に呼びかけていました。その手段となったのが、賛写版による雑誌の刊行です。

終戦の翌年、1946（昭和21）年7月には、清水と奥山も蝸牛工房から雑誌『とうしゃ文化』を創刊しました。「手にかけると止められぬこの版の魅力と、ガリ版の汚名を返上してあまりあるこの版の美しさ」^(註1)の普及を目的とし、版画技法としての可能性に特に注目すると創刊のことばにあります。

清水が『とうしゃ文化』誌上で自らの作を「創作版画」として発表するようになったのは1947（昭和22）年1月からです。「私の年頭発願一創作版画への発足として一月の表紙、今月の表紙、同挿絵（山）を試みました」^(註2)とあり、それ



『とうしゃ文化』第8号 蝸牛工房 1947年2月
賛写版、紙（冊子）奥山勇旧蔵

以前に発表した作品とは区別しています。そして、『[少女]』が制作された1948（昭和23）年には、判型もB5判から色紙大に変え、より大きな版画を載せられるようになりました。

『とうしゃ文化』を見ていくと、実用的な技術の追求以上に、創造的な表現を賛写版で試みることに関心が集中していく様子があきらかです。この姿勢は、数ある賛写版の雑誌の中でもユニークで、清水は当時、各地で開かれていた孔版技術の展覧会に賛写版による版画の出品を求められるようになっていました。全国の孔版画家との交流も始まり、そのなかには鳥取の板祐生や東京の若山八十氏など、戦前から賛写版で創作版画を制作していた作家もいました。

板は、切り抜きによる製版を得意とし、美しい和紙に多色刷りの作品で、従来の安上がりな簡易印刷という賛写版の概念を覆した人です。若山が1942（昭和17）年に創刊した、賛写版による雑誌『孔版』に寄稿していた文章でもなじみのある尊敬すべき先達でした。

戦前から展覧会へ賛写版による版画を出品していた若山は、戦争中に休刊になっていた『孔版』を1946（昭和21）年11月に復刊すると、誌面でつねに清水と『とうしゃ文化』に声援を送るようになりました。なかでも、第6号での「いかなる孔版人といえども、この人のものする孔版画の持味の純粹直情は、いかに孔版を唯一の芸術表現の手段として身近に操作しているかが察せられ、その無技巧に等しい表現の中に、汲めども尽きぬ迫力と感覚のよさを見逃すことは出来ない」という評価は、数十年にわたって清水の心の支えになっていました。^(註3)

版画の発表が主になった『とうしゃ文化』を、賛写版普及という当初の目的を離れすぎたとして16号で終刊した後、清水が重点を置いたのは展覧会への出品です。若山に作品を送って助言を受けているうちに、仏像を描いた清水の作品《慈光》を、若山が第15回日本版画協会展に出品したことがきっかけになりました。

日本版画協会展は、1918（大正7）年に創立された日本創作版画協会を母胎とする、戦前から全国の版画家たちが出品し



若山八十氏『孔版』創刊号 1942年9月
賛写版、紙（冊子）奥山勇旧蔵

てきた展覧会です。1947（昭和22）年に清水が初入選した翌年からは、のちに木版画を手がけるようになる星裏一をはじめ、賛写印刷業を営む人たちを中心に、何人もの孔版作家が現れました。

こののち、清水は、大阪で川西英、前田藤四郎、吉原治良らが「関西画壇の旧弊を打破する」^(註4)と宣言して結成した汎美術家協会展や、国画会展などにも出品をはじめました。汎美術家協会の川西は、関西の賛写版技術者たちとも親しい版画家で、国画会は早くから版画を受け入れていた展覧会です。これらの展覧会に、清水は20年間にわたって出品を続け、制作の上でさまざまな実験を行い、強さと重厚さを備えた作風を培っていました。1960（昭和35）年に、シカゴ・インスティテュートで企画された「日本創作版画展」にも選ばれて出品しています。^(註5)

しかし、1967（昭和42）年、清水は《不毛》など3点の出品を最後に、日本版画協会を退会しました。図録には、「一番大切なものを見失わないようにしたい。私の仕事に意義があると信じたい。一それだけでよい。」という言葉が記されています。賛写印刷業と版画制作の両立が困難だったことを退会の理由としていますが、展覧会への出品をやめたあと、毎日の仕事が終わったあと、「一番大切な」である自身の制作は続けられていました。^(註6)

展覧会団体を離れ、一人で制作を続けた成果は、個展で問われるようになります



清水武次郎《つぼなど》1972年当館蔵

した。1971(昭和46)年2月、和歌山市の小松原画廊ではじめての個展「清水武次郎孔版画展」が開かれます。小松原画廊は、歯科医で絵画愛好家であった玉井一郎の画廊でした。清水は「孔版画につかれたように夢中でやって参りましたが、未踏の道だけに、あらぬ方向へ踏み迷うことを危惧しながら制作している日々です。これからどう歩むか—みなさまからの注言などを頂きたく、まとまりもないまま陳べることにしました。」^(註7)と挨拶しています。そして、1974(昭和49)年からは、和歌山市の画材店の主、白石寛の設けた白石画廊がおもな発表の場となりました。ここで、清水は毎年のように個展やグループ展を開き、精力的な作品発表を続けています。

個展のほかには、1964(昭和39)年に若山八十氏が中心になって創立した孔版画家の集まり「斎士会」^{しゃうじかい}へも誘われてきましたが、これには参加せず、斎士会解散後、1978(昭和53)年に創立された「点の会 日本和紙孔版画作家連盟」に加わりました。^(註8)「点の会」創立時の会員は、若山と清水のほか、大場正男(福岡)、山田泉(岡山)、山口正二(愛知)、安部みつ子(神奈川)、額賀保羅(神奈川)、小針美男(東京)、塚越源七(東京)、遠山喜栄蔵(千葉)、嘉部弘(東京)、水谷清照(神奈川)です。会員のなかには、清水や奥山が大切に残していた賛写版の雑誌や技法書で目にする名前、戦後、通信教育で人気を集めた賛写版講座の指導者の名前も見られます。いずれも技術者として優れていただけでなく、自分の表現で一つの世界を創り出したいと

いう思いに駆られて制作した人たちでした。

だからこそ、「あくまで濫觴の賛写版画を根幹として、その独自な手仕事性」^(註9)を重んじ、精緻な表現が主流であったなかでは異色だった、清水の大らかな型紙による画面構成とローラーによるぼかしによる作品も、彼らは評価

することができたのでしょう。自分と同じように創造的な孔版画の制作を目指している作家たちに出会えた清水は、彼らに呼びかけて「点の会」和歌山展を実現させています。

さらに、1980(昭和55)年には、清水は若い版画家たちと「和歌山版画80年の会」を創立しました。会員だった方々によると、毎年開かれる展覧会には、晩年に体調を崩した時でも、必ず出品したそうです。仲間の存在が制作の支えになることを、一人で長くやってきたあとに「点の会」に加わって、改めて感じたのではないかでしょうか。この会は1993(平成5)年に清水が亡くなるまで続き、清水の追悼展で14回を数えました。

清水はその仕事を「孔版画ひと筋」と振り返り、自身の孔版画は賛写版から始

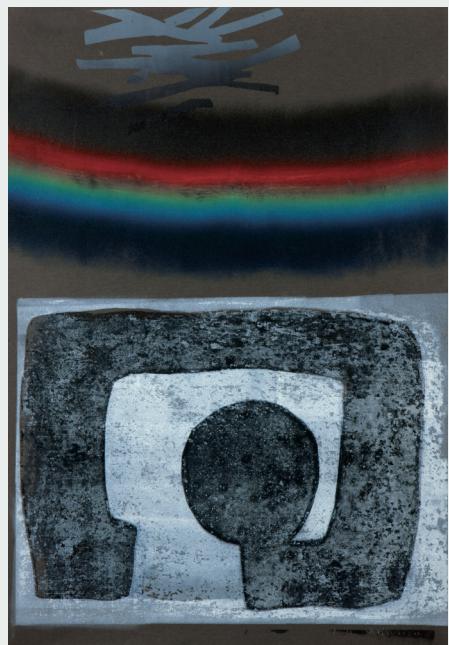
まったものだとしています。^(註10)しかし、作品を見ると、自身の表現を賛写版、孔版画という、技術の枠の中に抑えようとする息苦しさは感じられません。あらゆる版種を見慣れているはずの日本版画協会の展覧会でも「木版」と誤って目録に記されたほど、賛写版らしさ、孔版らしさを強調することのない、自在な表現です。^(註11)

もともと、賛写版のシンプルな仕組みは、手がける個人の工夫次第で新しい技法を創造することを可能にしていました。清水も、開発された新しい素材や技術を取り入れるだけでなく、人通りの絶えた夜中に印刷器のスクリーンをコンクリートの道に置き、ロウでフロッタージュして版を作ること、型紙を紙の上にのせて直接に刷ること、また、同じ版で異なる色を刷り重ねること、ローラーに虹色のインクを一度につけてそのまま刷ることなど、大胆な技法を試みていました。孔版は、清水にとってあらゆる表現を実現しうる柔軟さと、深さを備えた印刷術だったのだと感じさせられます。

「思い切って言えば孔版技術といふものは私自身にとっては手段でしかない(中略)。私にとってはただこの孔版技術を駆って私自身のこころを孔版画に示したいと云う一点あるのみである」^(註12)と清水は版画の制作を始めた頃に述べました。清水の孔版画は、つねに表現が先に



清水武次郎《[作品]》1970年代前半 当館蔵



清水武次郎《[作品]》1980年 当館蔵

立っています。「こころ」を、具象的なモチーフに託した頃も、色とかたちで画面を構成するようになってからも、技術はいつでも表現のためにありました。「まねしてもいいんですよ」と清水から言わされた人から、どうしても同じようにできなかつたと聞きましたが、それは、思いのほか高度な技術だったという以上に、その方法が、清水自身の表現のために考えられたものだったからでしょう。

多様な孔版技法のなかでも、とくに個人の総合的な技量を求められる謄写版の周辺には、自身の表現を求める人たちが集まる傾向がありました。全国には、清水のように謄写印刷業のかたわら、版画の制作を続けた孔版画家が何人もいます。謄写版は実用的な簡易印刷術であるために、版画の技法として認められにくかった経緯がありますが、技法は「手段」であって、美術である、あるいはないと、彼らの作品は示しています。

謄写版による孔版画家たちの仕事は、版画について、美術について多くのことを考え方を教えてくれます。彼らの仕事を見直すことは、孔版画の、そして版画と美術の世界により広がりをもたらすことになるでしょう。今回は、まず、その一人である清水武次郎の作品を、同時代のさまざまな種類の孔版画とともにご覧いただきます。謄写版がなつかしい人にも、謄写版を知らない人にも、きっと驚きと発見があるにちがいありません。

(植野比佐見)

註

- 1) 「刊行のはじめに」『とうしゃ文化』創刊号、1946年7月
- 2) 清水武次郎「創作版画について」『とうしゃ文化』8、1947年2月
- 3) 若山八十氏「孔版展望台」『孔版』6、1947年3月
- 4) 「汎美術家協会」挨拶文、1947年8月
- 5) *Japan's Modern Prints—Sosaku hanga*, January 21–March 20, 1960, The Art Institute of Chicago
- 6) 「退会」清水武次郎氏「日本版画協会通信」9・10・11・12合併号、1967年8月
- 7) 「清水武次郎孔版画展」リーフレット、1971年2月、小松原画廊
- 8) 清水武次郎「和歌山展あれこれ—自己紹介をかねて—」『点の会』2、1979年2月
- 9) 「第1回点の会 日本和紙版画作家連盟」展リーフレット、1978年
- 10) 清水武次郎「孔版画ひと筋」『版画館』18、1987年4月
- 11) 『第21回日本版画協会展目録』1953年
- 12) 清水武次郎「道・芸・若さなど」『孔版』22、1948年8月

わたしの謄写版—『ガリ版ものがたり』まで

志村 章子

謄写版とのつきあいも、いつの間にか30年を越えた。その間、「ガリ版のものがたり」を胸に抱いた多くの人々のもとを訪れた成果が2冊の本である。『ガリ版文化史』(田村紀雄氏との共編著、1985年、新宿書房刊)と『ガリ版文化を歩く』(1995年、新宿書房刊)がそれである。「ガリ版」とは謄写版のニックネームであることは、団塊の世代以上の方ならば、どなたでもご存じだと思う。謄写印刷が普及した大正デモクラシー下に、大衆のなかから生まれたと思われる。「孔版」の名称を最初に使用した織田子青の『孔版術大成』(1926年)にも、「ガリガリ版」の名をみることができる。

『ガリ版文化史』取材で最初に出会ったのが、謄写印刷を芸術の域にまで高めた若山八十氏である。謄写版の歴史にまるで無知だった私は、神田小川町の二股の三角地点にあったお宅をたびたびお訪ねしたものである。不在の折りは古書会館に出向けば書棚の間に必ず先生の姿を発見することができた。最晩年の氏からは謄写版史を学び、多くの文献も拝借した。今にして思えば、なんと贅沢な時間であったことか。

謄写版の開発者は、滋賀県出身の堀井新治郎父子(初代は元紀、二代は仁紀と称した)である。神田鍛冶町の堀井謄写堂の社屋にも足しげく通った。メインの取材先は松村正雄取締役であった。戦中には、天津、上海支店長だった方であり、戦争と中国時代の話を好んだが、新中国には一度として足を運ぶことはなかった。「戦前の中国を知る者は行きたいと思わないものです。」と語っていた。松村さんの中国は思い出の中にしかなかったのであろう。当時の堀井仙太郎社長の計

らいで、滋賀県下の旧宅から本社に運ばれた『堀井本家家事記録』には、100年近い歳月をへた湿っぽいにおいと共に、紙魚のトンネルが無数にうねっていた。こうして私のガリ版研究は始まったのである。



神田駅前通り、板倉謄写堂 1982年、堀井謄写堂本社取材の途上 筆者撮影



「謄写版発祥の地」モニュメント 記文「明治27年(西暦1894年)堀井新治郎父子が我が国初の簡易印刷機を発明し「謄写版」と命名、発売と共に此の地に謄写堂を創業した。」ホリイビル入口(堀井謄写堂跡、神田鍛冶町2丁目2番地)

「OA元年」と呼ばれた1994年は、謄写版発祥100年の年でもあった。コンピューター時代を目前にして、年賀状などを手軽に作れると人気を集めた感熱式多色孔版印刷器「プリントゴッコ」(理想科学工業より1977年に発売、2008年販売終了)さえ、盛りを過ぎていた。その原点である謄写版はといえば、愛好者は存在するものの、過去のものになりつつあったのである。ヤスリ工場などは撤退も早かつたが、堀井謄写堂(印刷器など)、四国謄写堂(ロウ原紙)も、80年代の初頭には生産を終えていた。

この年に、ガリ版愛好者の会「ガリ版ネットワーク」が誕生している。その発端は、同年6月の東京経済大学主催の「ガリ版の100年—等身大のコミュニケーションツール」展とシンポジウムであり、私は企画当初からすべてに参画させていただいた。同大図書館を休館しての4日間という短い会期であったが、来場者は1000人を超えていた。まだ謄写版を愛好する人々は多いこと、それが全国規模であることを再確認したのである。

「ガリ版の100年」展には、少なくない「謄写器材難民」も来場していた。彼らは、口々に「ヤスリは、原紙は、インクはどこに行けば入手できますか?」「器材がなくなり『通信』がつくれません」と躁急にその答えを求めていた。

一方では、不用になったロウ原紙や謄写印刷器を「使ってほしい」と展示会場に運び込む人々もいた。これがヒントとなって、同年秋には、友人であるガリ版ミニコミ誌の編集者と「ガリ版ネットワーク」を立ち上げたのである。その活動は、

① 不用謄写器材を収集し、必要とする

人々に手渡す

- ② 散逸、消失しつつある史料の収集、保管
- ③ ガリ版関連情報の収集と発信
- ④『ガリ版通信』の発行

の4点であった。個人、グループ、関連企業、行政など最盛期には300会員を超えた。以来、15年間の仕事は寄贈品の荷解き、発送作業などの肉体労働に終始したが、その間に触れた明治以来の多種の器材群は、謄写器材発展史の生きた教科書であった。戦前製造の印刷器の木工仕事のすばらしさ、それに比べて戦後普及期のベニヤ製の外函のお粗末なこと、土佐



「四国原紙」広告 菅野清人『実用百科 職業謄写版印刷の仕方 製版篇』1958年、金園社より

原紙と美濃原紙の違い等々に西と東の器材、技術の独自の発展史があったことも気づかされた。

さて、2冊目の『ガリ版文化を歩く』は、謄写版と共にいる人々を訪ねた記録である。なかでも、戦中の生活綴り方教育を基点とした北方綴方教師たちとの出会いには心をゆさぶられた。こんなにも子どもたちの側に立ち、彼らを愛した若い教師たちが存在したのかと。1993年には、83歳の元教師・加藤周四郎氏(北方教育の理論家にして実践者)と、75歳になった生徒のクラス会にもお邪魔して取

材した。65年をへてもなお加周先生(愛称)と生徒たちはガリ版文集づくりでつながっていることを実感した。

そして、1994年には、戦中の堀井謄写堂天津支店の店員だった、李紹甲氏(当時80歳)を天津のご自宅に訪ねた。彼は1960年代の文革時に紅衛兵たちの襲撃を受け、ガリ版史料を失っている。彼は優秀な店員だったのであろう。1937年、日本に謄写版留学をして草間京平に多色刷りを学んだ。草間によって開発された技術は、50余年を謄写技術者として生きた李氏を通じて、中国の小学生に伝えられた。それは稀有な例である。中国に普及した謄写版は実用印刷器として大活躍した。多色印刷技術を発展させ、孔版画という創作版画を生み出したのは日本だけなのだから。

近代の日本人(アジアの国々も含め)と謄写印刷との関わりは広く、そして深い。どこを掘っても、ガリ版のものがたりが眠っている。そのことが興味深く、その後も取材を進めてきた。そして3冊目の本『ガリ版ものがたり』(大修館書店)が近々刊行予定である。

和歌山県立近代美術館の「版画の「アナ」—ガリ版がつなぐ孔版画の歴史」の主役である清水武次郎も独自の“ガリ版のものがたり”を和歌山の地で紡いだ版画家である。21世紀を10年も過ぎて、彼は私たちになにをものがたってくれるだろうか。

今は彼の仕事に早く出会いたいと、ときどきして待っている。

(しむら・しょうこ ガリ版文化史研究者)

※現在、「ガリ版ネットワーク」は「新ガリ版ネットワーク」として「東近江市ガリ版伝承館」(旧堀井邸、滋賀県東近江市蒲生岡本町662)で活動が継続されている。全国各地の人々から寄贈された謄写器材は、2階建ての古い蔵の中で静かに出来番を待っている。毎年晚秋には、ガリ版のあれこれをテーマに手づくりイベントを開催してきた。

吉田政次の世界展



《青春の輝き 2》 1969 年 木版、紙 当館蔵

芸術作品は表現の力強さや主張の烈しさによって評価される一方で、そこには、ときに静けさが求められることがあります。吉田は、静かな世界を作品に結晶させた芸術家の一人だったと言うことができるでしょう。

1917(大正6)年、現在の有田川町に生まれた吉田政次は、1941(昭和16)年に東京美術学校(現在の東京藝術大学)を卒業後、中国戦線に従軍することになります。帰還してしばらくたった1948(昭和23)年頃から、木版画に取り組み始め、癌のため制作を離れることとなる1968(昭和43)年まで、ほぼ20年にわたって版画家として活躍しました。

吉田が版画を試みる要因はいくつかあったようですが、現代版画の収集と紹介を熱心に行ったアメリカ人、オリバー・スタットラーがまとめた書籍の中に、吉田の言葉が紹介されています。それによると、彼が版画に取り組み始めた大きなきっかけは、やはり和歌山ゆかりの作家である恩地孝四郎と出会ったことだった

と言います。一方、戦前から興味を抱いていた抽象絵画に進むきっかけを与えたのもやはり恩地でした。^(註1)

油絵で抽象を試みるもの、戦後は質の悪い絵具しか入手できず、平面性を強めていく画面は、「どんなに努力をしても家のペンキ塗り同然」の失敗作になってしまします。それが「版画にすると同じアイデアが効果」を発揮したのだと言います。彼が失敗と呼んだ作品がどのようなものか、現在見ることはできませんが、例えばモンドリアンやポリアコフらの作品に見られる色の面が、さまざまな筆跡による絵具の質感に支えられていることを思い起こさせます。

ただ、抽象的で平面性を強めたというだけでなく、彼には作品で追求すべき確固とした世界がありました。それは戦争中の「つらく、無秩序で、暴力的」な体験とは異なるものであるはずだったので、戦後東京に戻って見た展覧会は「展覧会全体が戦争そのものだと感じ」させるものでした。「何か秩序のある、穏やかな、平和的なものが欲しい」と感じたことから生み出されたのが、吉田の静寂をたたえた作品の世界なのです。

スタッラーの本が最初に出版されたのは1956(昭和31)

年ですから、それ以後も吉田の制作は続き、次々と新しい表現にも挑んでいますが、その制作の根本で求められた秩序だった穏やかで平和的なものは変わることがなかったと思われます。

細かく刻まれた平行線の塊が層を成す面や、木版を切り抜い



《静 28》 1953 年 木版、紙 当館蔵

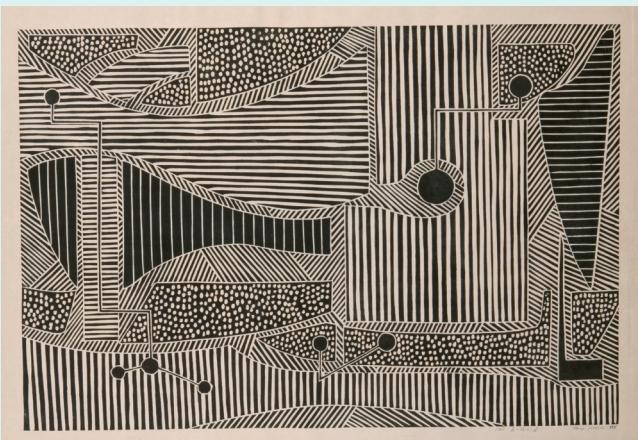
て作り出される表情に富んだ面は、弱々しさとは無縁の寡黙さを守っています。それは例えば、岩にしみ入る蝉の声に拮抗する、強靭な静けさをたたえた世界とも言えるでしょうか。

今年は1971(昭和46)年に吉田が54歳で亡くなっています。40年になります。この機会にその作品を振り返り、静けさの中に広がる豊かな世界を垣間見る機会を持ちたいと思います。

(奥村泰彦)

註

- 1)スタッラー、オリバー(猿渡紀代子監修)『よみがえた芸術—日本の現代版画』玲風書房、2009年、pp.185-188。以下引用は同書から。



《森の精 1》 1955 年 木版、紙 当館蔵

版画の「アナ」

ガリ版がつなぐ孔版画の歴史

3月19日(土)～4月17日(日)

和歌山県出身の清水武次郎(1915-1993)の独創的な贋写版による作品を中心に、合羽版から現代版画の主要な技法のひとつとなつたシルクスクリーンにいたる多彩な孔版画の歴史をたどります。



清水武次郎
『夜の壺』
孔版、紙
1957年 当館蔵

吉田政次の世界展

3月19日(土)～6月12日(日)

没後40年を迎える有田川町出身の版画家、吉田政次(1917-1971)の作品を紹介します。



吉田政次 『空間 17』
木版、紙
1962年 当館蔵

開館／9時30分～17時00分（入場は16時30分まで）休館／毎週月曜日（祝休日の場合は開館、翌平日休館）

コレクション展 2011－春

3月19日(土)～6月12日(日)

吉田政次の作品《青春の輝き》に題を取り、和歌山ゆかりの作家と近代日本美術コレクションから作家が20代で制作した作品を中心に紹介するとともに、没後30年となる和田傳太郎の戦前の作品によるコーナーを設けます。また荒川修作、中里斉、森口宏一ら、最近の物故作家を紹介します。

ポップ？ ポップ！ ポップ♡

コレクションに見るポップなアートの50年

4月29日(金・祝)～6月19日(日)

アンディ・ウォーホルやロイ・リキテン斯坦らによるアメリカのポップ・アートの展開と、その影響を受けた日本人作家の作品を紹介するとともに、明るく大胆な色づかいや、身近なものを用いた機知に富む手法などにより、見る者を楽しく、元気にしてくれる現代のポップな作品を、コレクションを中心に紹介します。



井田照一 『Blue Cake』
リトグラフ・シルクスクリーン、紙 1967年 当館蔵

友の会版画プレゼント

会員のみなさま、毎年恒例の版画プレゼントの引き換えはお済みでしょうか？

紙面での紹介が遅くなりましたが、今年度は吉原英里さんが、4つの素敵な作品を制作してくださいました。

作品のテーマは画家の椅子。画面には、セザンヌ、ミロ、レジェ、モランディ、それぞれの画家の作品の断片と椅子が登場します。画家自身の姿は見えないけれども、その存在の気配がどこか感じられる不思議な作品です。お好きな1点をお選びいただけます。ミュージアム・ショップにてお受け取りください。



1 『画家の椅子・セザンヌ』



2 『画家の椅子・ミロ』



3 『画家の椅子・レジェ』



4 『画家の椅子・モランディ』

作品データはすべて、下記のとおり。
2010(平成22)年 エッチング・アクアチント・ラミネート・手彩、紙
12cm × 15cm (イメージサイズ) 22cm × 24cm (シートサイズ) ed.90

メールマガジンの
ご案内

展覧会の情報はもちろん、講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイマーーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ホームページよりご登録いただけます。ぜひご利用ください。

友の会
会員特典
いろいろ

1. 展覧会の無料観覧（同伴者1名まで）
2. 展覧会レセプションへのご招待
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 当館ミュージアムショップ、レストランでの割引
5. 各種行事への参加（美術鑑賞ツアーや、ミュージアムコンサートなど）
6. 版画の頒布会への参加

入会のご案内

一般会員 6,000円
学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。詳しくは友の会事務局まで。

Tel. 073-436-8690

担当：松原

